中山　林蔵

横堀駅から東へ４キロメートルほどのところに位置する東山地区。ここは標高が２５０メートルの台地である。ここのゆるやかなしゃ面には、赤く色づいたりんごの実があたり一面に枝をしなわせている。

この東山地区は、かつては酸性の土壌のため、だれにも見向きもされず、ミズナラやコナラなどがところせましと枝をぶつけ合い、地面にはススキがうっそうと生えていたところである。

しかし、この土地に目をつけ、奇跡を起こした人物がいた。この地を開拓しようと一人で乗り込んだ雄勝町秋ノ宮に住む中山林蔵である。

２０歳のころから山間の農業のあり方に疑問をもっていた林蔵は、４４歳をむかえた昭和８年、「わずかな農地にしがみついて、米作りだけでは先が見えている。果樹もあわせて収入を増やさなければ、村の生活はよくならない。」と、土への挑戦の決意をかためたのである。

ひまを見つけては、村の周辺を歩き回り、果樹園に適する土地を探し求めていた林蔵であったが、おりしも、条件にかなう絶好の土地を見つけ出した。当時の小野村が所有する東山地区である。ここの土地は農作物には不向きで、熊が出る危険地帯であったが、開墾すれば立派な果樹園になることを直感したのである。

林蔵は、この土地を借りるため、さっそく村の有力者の家を一軒一軒訪ね歩いた。はじめは、ひややかに対応していた村の有力者たちも、「１年もしないうちに返すことになるだろう。」と言いながらも、根負けしてついに土地を貸すことを承諾した。

林蔵は、かけだしたくなる気持ちをおさえて、家族のまつ秋ノ宮の自宅に向かった。同時に、「５年であの土地を畑にしてみせる。」という熱い思いでいっぱいになった。

林蔵は、家族を秋ノ宮に残し、日ごろかわいがっている秋田犬のアカを連れて山に入った。木を切り倒し、根株を掘り起こし、畑として整地するという作業を開始したのだ。しかし、荒れた山はだは、人間の手が入ることをかたくなにこばもうとするかのように､力まかせに振り下ろしたクワもはねかえされる。それでも、林蔵は祈りにも似た気持ちで、ひとクワひとクワを地面に打ち込んだ。

一日の作業が終わると、夜つゆをしのぐだけの粗末な小屋で、大好きな酒を飲みながらアカを相手に、なかなか進まない作業のことや思い出話をするのが日課となった。

日当５０銭で人夫７，８人をやとえるようになってからは、開墾の進み具合

もよくなったが、それでも毎日が単調な土とのたたかいだった。耕してはりんごの苗木を植え、ジャガイモや豆類をまき続けた。しかし、せっかく愛情をこめて育てた苗木も雪の重みに押しつぶされてしまうこともあった。エサを求めにきた野ねずみが、わがもの顔で荒らしまわることもたびたびあった。林蔵はそれでもあきらめず、黙々とりんごの研究に取り組んだ。

技術はもちろん、モンパ病、モニヤリ病などのりんごの大敵について五問が出ると、迷わず青森県の果樹試験場を訪ね、納得のゆくまで質問した。自分のやり方のまずいところはすぐに改め、栽培技術の改善に心をくだき続けた。

予定より１年早く、４年目にして、５ヘクタールの開墾をすべて終え、待望のりんごもぽつりぽつり赤い実をつけ始めた。ジャガイモも平地の２倍もの収穫をあげるまでになった。

昭和２６年の農地改革で、この土地は林蔵のものとなり、付近も開拓地に指定されることになった。そのため、農家の二男、三男や引揚者が次々に東山にやってきた。その数は３８戸におよんだ。林蔵は、これらの人たちに長年苦労したりんご作りのひけつをおしみなく教えた。「みんなには、自分と同じ苦労はさせたくない。」これが林蔵の口ぐせだった。このふるさとが豊かになり、人々が平和で幸せなくらしをおくることができれば満足だった。

広い山すそは、またたく間に見事な畑に作りかえられ、「国光」「ゴールデンデリシャス」など、つぶぞろいの実をつけるりんごの木がずらりと並ぶまでになった。

林蔵の作ったりんごは、昭和３３（１９５８）年の品評会で農林大臣賞に輝いたのをはじめ、賞品、賞状は二百余点にのぼった。

野良着を黒の礼服に着替え、クワをステッキの持ちかえた林蔵は、自分の歩んできた長い長い道のりを静かに振り返っていた。副知事や町長、議員など多くの人々が自分のまわりをかこみ、１枚の写真におさまろうとしている。苦労を共に分かち合った妻と共に顕彰碑の除幕式にのぞめるとは…。このとき、林蔵はすでに７９歳になっていた。「土地を掘って生きる生涯」を閉じる２年前のことだった。